



Data

監督・脚本：エドアルド・ファルコ
ーネ

出演：マルコ・ジャリーニ/アレツ
サンドロ・ガスマン/エンリ
コ・オティケル/ラウラ・モ
ランテ/イラリア・スパダ/
エドアルド・ペーシェ

■■■ショートコメント■■■

◆2015年の東京国際映画祭で観客賞を受賞したのが、イタリア発の心温まるヒューマンドラマとして高く評価された本作。たしかに、自信たっぷりの外科医トンマーズ（マルコ・ジャリーニ）と、ワケありで自由奔放な神父ピエトロ（アレッサンドロ・ガスマン）との掛け合いを軸とした面白いストーリーは、私たち団塊世代のおじさん（じじい？）にはわかりやすい。

東京国際映画祭の他の出品作は知らないが、多分クソ難しいテーマの作品が多い中で、本作がもっともわかりやすく楽しむことができたため、観客賞を受賞したのだろう。しかし、フランスで大ヒットした『最強のふたり』（11年）（『シネマルーム29』213頁参照）とよく似たテイストの本作はその分ちょっと軽いから、ホントの評価は難しいかも…。

◆導入部に見る外科医トンマーズの自信たっぷりのサマは、米倉涼子が主演するテレビドラマ『ドクターX～外科医・大門未知子～』と同じように、嫌味タップリ。太っちょの看護師に対する「もう少し痩せたら」的発言は、セクハラと紙一重だ。そんなトンマーズでも娘のピアンカ（イラリア・スパダ）がアホな亭主ジャンニ（エドアルド・ペーシェ）と結婚し同居しているのは我慢しているうえ、長男のアンドレア（エンリコ・オティケル）から、いつも部屋に招いている男とのゲイ関係を告白されそうだとわかっても、それを尊重しようとしているから、イタリア人の人権感覚はさすがだ。

ところが、予想に反してゲイ宣言ではなく「医師への道をやめて神父になることを目指す」発言を聞いたトンマーズはビックリ！それを聞いた後、表面上はともかく、息子をそんな風に洗脳したのはピエトロ神父だと思ひ込むトンマーズの姿は単純そのものだ。そんな思ひ込みから本作のコメディタッチのストーリーが展開していくが、こんな脚本なら俺でも書けそう…。

◆投票日まであと1カ月余に迫ったアメリカの大統領選挙におけるヒラリー・クリントン

v s ドナルド・トランプのテレビ討論の様子が大々的に報じられているが、その泥試合ぶりはいかげなもの……。それと同じように(?)、本作中盤ではまずトンマーズがピエトロの詐欺師ぶりを暴くためにピエトロの下に「潜入捜査」(?)をする姿が描かれるが、それはいかにもマンガ的。また、アンドレアがピエトロを自宅に招いたことによって、トンマーズの企みがバレてしまった後の2人で交わされた「密約」によるドタバタ劇のサマも、いかにもマンガ的だ。

もともと、それをマンガ的というかユーモアたっぷり人間味にあふれた展開と言うかは人それぞれの評価だから、そこが本作のポイントになる。アハハと笑いながら2人の中年男が織りなすドタバタ劇を見ていると、あなたには人間の本質がしっかり見えてくる……。?

◆本作でもっともシリアスなシーン(?)は、ある日ピエトロが連れて行った丘の上でトンマーズと並んで座り、自分の前科持ちの過去を告白し、神との出会いを語るシーン。そこでの2人の会話は「医者に人生が治せるか?」「神に心臓病が治せるか?」「こんがらがった家族はどう治す?」等だから、必ずしも論点が整理されているわけではないし、意見が一致したわけでもない。しかし、一本の木に梨の実がなり、それが落ちるのはニュートンの法則?それとも神の御業?真正面からそう問われると、その答えは難しいはずだ。

一人でスクーターに乗って気楽にどこへでも出かけていく身軽さが、ピエトロ神父の身上だったが、ある日そのスクーターが交差点で車と衝突!こりやてっきりピエトロの命はアウトと思ったが、さてその後の展開は……。?

2016(平成28)年10月13日記